

金沢柵推定地金沢城跡西麓部の調査成果速報

藤原正大（横手市教育委員会）

1. 調査要項

遺跡名：金沢城跡（かねざわじょうあと）

調査回数：第12次調査

調査地点：金沢城跡西麓部

所在地：秋田県横手市金沢中野字根小屋及び沢小路地内

調査面積：測量調査面積：8,700 m² 発掘調査面積：300 m²

調査期間：令和2年8月18日～令和2年12月10日（予定）

調査主体：横手市教育委員会教育総務部文化財保護課

調査指導：後三年合戦関連遺跡整備指導委員会・後三年合戦史跡検討会
秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室

2. 調査の概要

①金沢城跡西麓部の概要【図1】

金沢城跡西麓部は、羽州街道を挟んで陣館遺跡の西側に位置する南北およそ350m、東西およそ200m、金沢公園入口から金澤八幡宮大鳥居までの範囲です。ここには山中に尾根を削って造成したと思われる、平場が幾重にも連なる地形（段状地形）が5ヶ所存在します。

金沢城跡西麓部は、景正功名塚で行った発掘調査（金沢城跡第10次調査）で検出した柵跡（柱穴列）や、陣館遺跡から延びる六尺道と呼ばれる道路が向かっています。このことから、まだ確認されていない「金沢柵」の本体である「館」部分が、上述の段状地形のいずれかに存在する可能性を想定し、今回の調査を実施することとなりました。

②金沢城跡第12次調査について【図2】

測量調査の成果（速報）

今年度は、金沢城跡西麓部中央の段状地形について、測量調査を実施しました。その範囲は南北およそ65m、東西およそ90mで比高差が18mあり、民家の立ち並ぶ標高およそ79mの羽州街道側からみると見上げるような急傾斜の地形になっています。8月中旬から下草刈りを開始したのちにこの場所の測量調査を実施した結果、段状になった全部で9段の平場があることを確認しました。

この成果から、南側に隣接する段状地形と比べやや面積が狭く、街道から平場までの比高差が大きいことがわかります。また、南側の尾根には、尾根を切った堀切が存在することが明らかになりました。

それぞれの平場の面積はおおよそ以下の通りです。

1 段目：164 m² 2 段目：35 m² **3 段目：405 m²** 4 段目：223 m² 5 段目：105 m²
6 段目：62 m² 7 段目：93 m² 8 段目：90 m² 9 段目：74 m²

発掘調査の成果（速報）

検出遺構：掘立柱建物跡（柱穴 50 基以上）・溝跡 7 条以上（苑池・排水溝等）・

堀切 1 地点・切岸 2 地点（苑池・排水溝の上位）・

整地層 2 地点（尾根の盛土・平坦部の盛土）

出土遺物：瀬戸美濃大窯皿破片・染付破片（中世後期）

3. 現時点のまとめ

前述の測量調査の成果を基に、最も平場の面積が大きい下から 3 段目の平場について、建物跡などの遺構が存在する可能性が高いと推定し、発掘調査を行いました。

発掘調査の結果、平場の北側と南側を走る尾根を削り、元々沢目であった平場中央部に土盛りを行って平坦部を作り出す、大規模な整地作業（地業）を行っていることを土層の観察から確認しました。また、このような整地が複数の時期に何度も行われたこともわかりました。遺構は複数の掘立柱建物跡（柱穴）を平場の南側から検出したほか、平場の東端からは石組みと溜井のような遺構や、平場の南端から東端を巡る溝跡を確認しています。

以上のような建物跡・溝跡の年代や、複数回の地業がいつ行われたのかについては、遺物の出土がほとんどないため検討する手掛かりが少ない状況です。しかし、最後に整地された層（一番上の整地層）からは 16 世紀代（中世後期・戦国時代）の陶磁器片が出土していることから、それより以前にこの場所が利用されていると考えられます。

4. 今後の課題

まだ、発掘調査中ですので詳細については述べられませんが、遺跡の景観の類例がないか今後資料調査をしていきます。また、どのような掘立柱建物跡が建っていたか、柱間はどのくらいなのか、さらに柱の掘り方や柱穴の形態を精査し、建物の復元や時代を考えていきます。整地層については、遺構面が複数あることから、どの遺構同士が同時期なのか今後検討します。

金沢城跡西麓部は、面積 70,000 m²と広大であり、今回は 300 m²とその一部を調査したに過ぎませんが、立地・地形を分析し、最小の調査で最大限の成果があがるように来年度も調査を行いますので、地域の皆様をはじめとして、多くの皆様からご指導・ご支援よろしくをお願いいたします。

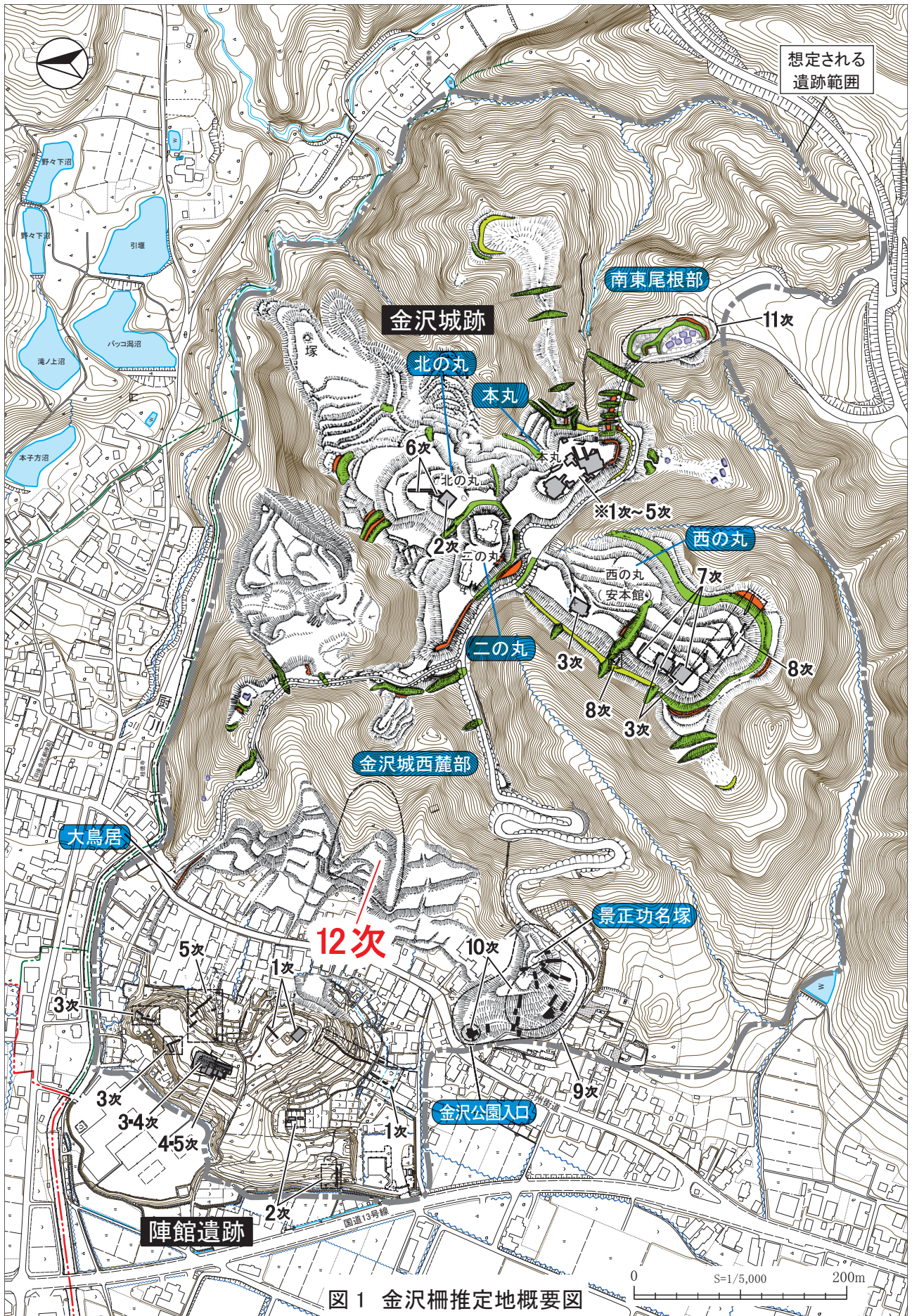


図1 金沢城推定地概要図

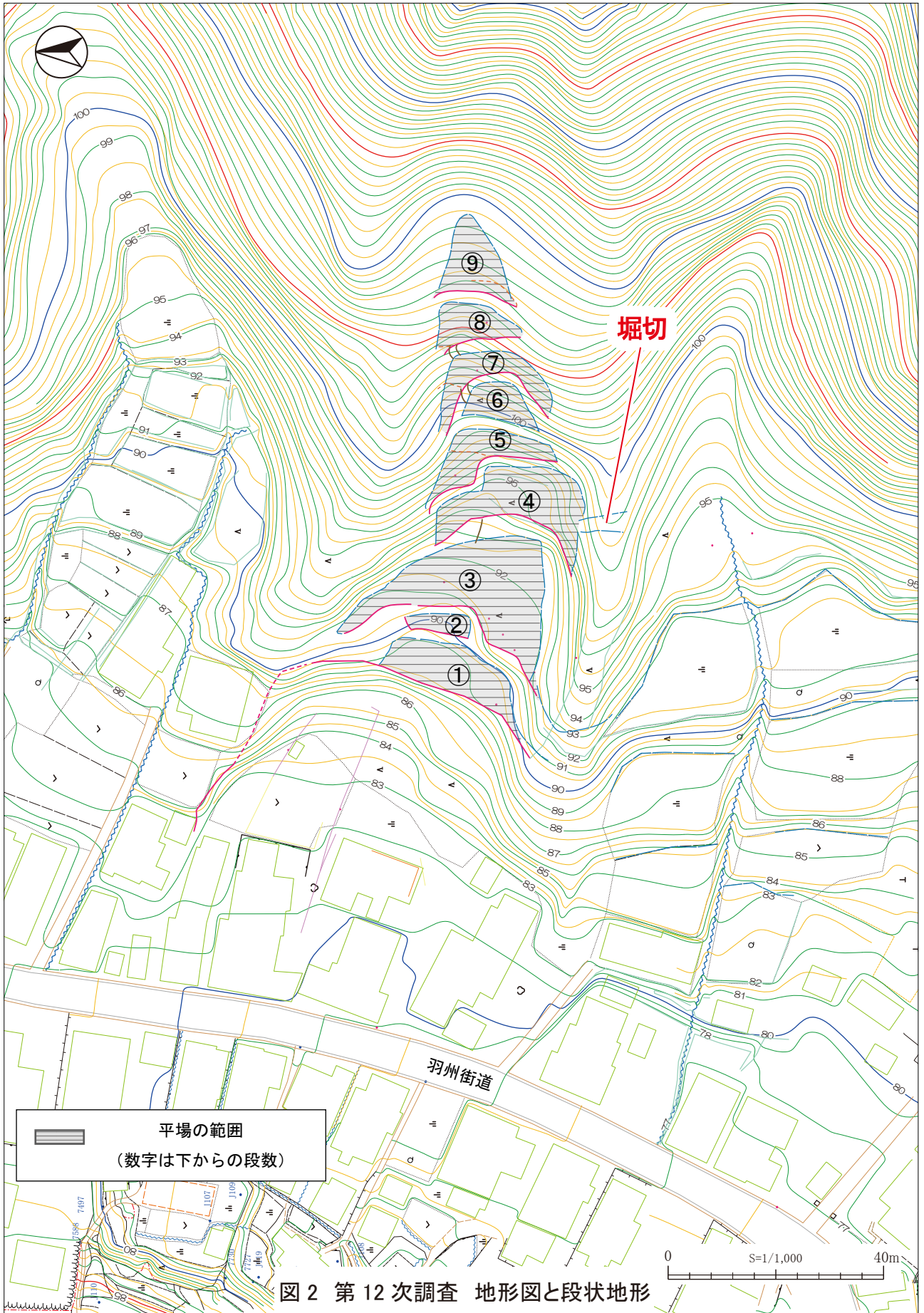


図2 第12次調査 地形図と段状地形